

先住民の苦闘



軽部 謙介

帝京大学 教授 (元 時事通信社 解説委員長)

世界中で、新型コロナウイルスのニュースが連日報道されている。このウイルスだけでなく、人類の歴史は感染症との戦いだったそうなのだが、米国の先住民(ネイティブ・アメリカン=インディアン)が白人のもたらした感染症でバタバタと倒れたのは有名な話だ。

その後も米政府によって居留地に押し込められた先住民たちの苦闘は続き、そして今でも深刻な失業と差別に直面している。

75年前の4月1日、米軍が沖縄本島に上陸し、住民を巻き込んだ戦いが始まった。

「鉄の暴風」と呼ばれ、県民の4分の1が死亡。集団自決やひめゆり部隊の全滅など、今に語り継がれる悲劇が島のあちらこちらで発生した。

実はこの凄惨な戦いにインディアン部族出身の兵士たちが参加していたことは、日本であまり知られていない。

沖縄戦で活躍したのは、ユタ州とアリゾナ州の州境近くに住む先住民、ナバホ族の若者たちだ。彼らは「ナバホ・コード・トーカー(暗号をしゃべる人)」と呼ばれた。

なぜ、暗号なのか。それはナバホ族が先祖から引き継いだ言葉が誰にも聞き取れず、解読できない特殊な言語だったからだという。そこに目をつけた米軍は彼らを偵察や伝令に利用。最終的には400人のナバホ族の若者がこの部隊に加わり、太平洋戦線の各地を転戦した。

英語の無縁は日本軍に傍受されている可能性もあるが、ナバホ族の言葉は全く意味不明。米軍でも理解できる人はおらず、仮に日本軍が傍受しても聴取不能だったという。結局この暗号は終戦時まで破られず、彼らは多くの戦線で武功をあげた。

しかし、戦後この部隊の存在はしばらく隠密にされた。機密扱いが解除されて彼らの存在が明らかになったのは1968年。戦功をあげた部隊や兵士に贈られる勲章が授与されるのは、さらに2000年まで待たねばならなかった。

この部隊が一種の情報戦を戦っていたからだというのが、顕彰の遅れた理由とされたが、「インディアンへ

の差別ではないか」という見方も根強くあったという。

ちなみに、日本軍との戦いで有名になったインディアン兵士といえばアイラ・ヘイズだろう。ピマ族出身の彼は硫黄島の激戦を戦い抜き、摺鉢山に大きな星条旗を立てた6人のうちの1人だ。何気ない行為だったのだが、この写真が本国で報じられるや、勝利の立役者として全米で熱狂的に迎え入れられる。

クリント・イーストウッドが監督した映画、『父親たちの星条旗』にも登場するが、ヘイズは帰国後、英雄であることの重圧に耐えかね、アルコール中毒となり早世した。その生涯は歌にもなり、ボブ・ディランまでもがカバーしている。

摺鉢山に星条旗を立てる6人の兵士の構図は米国では非常に有名で、アーリントン国立墓苑の北側に大きな記念碑も建っている。

アメリカという国が東から西に拡張していくのに伴い、居留地に押し込められた先住民族たちは、映画などで「敵役」をつとめることが多かった。

侵略者は入植してきた白人たちで、むしろインディアンは被害者であることが米国社会にも広く認識されてきたのはごく最近のこと。「白人が善でインディアンが悪」という単純な見方は次第に影をひそめ、映画界でも『ダンス・ウィズ・ウルブス』など白人との戦いを先住民の視点から描いた傑作が生まれてきた。

しかし、多様性を旨とする米国社会の中でも、先住民たちへの差別は厳然として存在するし、時としてそれは先鋭化した形で姿をみせる。

たとえばモンタナ州リトルビッグホーンに設置された先住民の記念碑をめぐる「事件」などはその典型だろう。

ここは、1876年にインディアンとの戦いで全滅した「カスター将軍と第七騎兵隊」最期の地だ。今は国立公園として整備されており、「レンジャー」と呼ばれる係員が案内してくれる。

話がわき道にそれるが、カスター将軍の部隊が全滅したのは戦力を分散したから。日本でいえば武田信玄

が川中島の戦いで採用した「キツツキ戦法」だ。部隊を二手に分けて、一隊が山上に陣取る上杉謙信の本隊を追い出し、川中島で待ち受ける信玄本隊と挟み撃ちにする計画だった。

カスター將軍も似たような戦法をとり、敵を挟撃することを決める（実際には三つに分けたようだ）。しかし、川中島の戦いで謙信がこの戦法を見破って早々と下山したのと同様、インディアン部隊の指揮官もこれを悟り、逆にカスター軍を待ち伏せ全滅に追い込んだ。これは白人社会からすれば屈辱的な敗北。この後インディアン討伐に拍車がかかる。

リトルビッグホーンには、以前から第七騎兵隊の慰霊碑が存在したが、ここに先住民追悼のための記念碑ができたのは1990年代のことだ。長年の先住民たちの要望が実った形だったが、「カスター軍を全滅させたインディアンを追悼するとは何事」という脅迫めいた抗議がいくつも寄せられ、連邦議会でも問題になった。

ケネス・フット博士の名作、“Shadowed Ground”（邦訳『記念碑の語るアメリカ』）にはこう説明されている（カッコ内は軽部注）。

「1992年に（カスター將軍最期の地の）名称がリトルビッグホーン古戦場国立記念施設へ変更されると、戦死した英雄を称える問題が再浮上し、このとき初めて、騎兵隊でなくリトルビッグホーンで戦った先住民の戦士に関心が注がれたのである」

「先住民の指導者や殉教者を公認し、アメリカの英雄として受け入れることはこれまで実現していない。ラシュモア山（サウスダコタ州）近くのクレイジー・ホース（第七騎兵隊を全滅させたスー族の戦士）の聖地でさえほとんど注意が向けられず、他の先住民指導者を称える国立史跡は皆無である」

リトルビッグホーンの記念碑問題は、米国内で先住民に対する差別が潜在的に存在することを印象づけた。

現在でも先住民の生活は苦しい。ユタ、アリゾナ、ニューメキシコなどの西部諸州を車で走るとよくわかる。インディアン部族の「居留地」に出くわすのだ。先住民たちの自治が形のうえでは守られているが、居留地内の失業率は50%前後という驚異的な高さに達し、アルコールや薬物中毒などの事例は後を絶たない。

このような惨状を打破するため、先住民たちが目をつけたのがカジノだった。多くのインディアン部族がカジノ経営に乗り出し、「ネイティブ・アメリカン・カジノ」という雑誌まで発行されているほどだ。

現職下院議員らが起訴されてワシントン揺るがした「エイブラモフ事件」(2006年)は、政治家とロビイ

ストがカジノ経営にいそしむインディアンをだまし、大金を巻き上げたというケースだ。

被害にあったティグア族を訪ねて話を聞いたことがある。彼らはテキサス州の西端、メキシコ国境の街、エルパソ近郊に暮らしていた。

「私たちの経営するカジノが『違法操業をしている』という誤解を受けて、州当局により閉鎖の命令を受けた。部族の雇用の受け皿になっており、大変困っていたところに、ワシントンからエイブラモフというロビイストがプライベートジェットで乗りつけてきた。彼は『州の命令でカジノが閉鎖されてしまったのなら、連邦議会でその命令を取り消す立法を行えばいい』と言った。起訴された下院議員にもワシントンで会ったが、自信満々だった。ただ、彼らはその工作費として巨額の金を要求してきた」

インタビューに応じてくれた副部族長はそう言うため息をついていた。結局ティグア族が支払ったのは総額420万ドル。しかしこのロビイストや下院議員は部族のために何もせず、だました金を遊興費などに充てていた。彼らが差別意識むき出しでこの部族のことを「類人猿」「モンキー」などと呼んだ多数のメールも起訴状に記載されている。

この事態が公になり、議会で公聴会が開かれたとき、インディアンを引く上院議員として活躍していたベン・ナイトホース・キャンベル氏はこう怒りをぶつけた。

「この国は400年の間、インディアンをだましてきた。したがって今回が最初というわけではない。しかし、文明化し民主化された今日、アメリカ・インディアンに対する恥ずべき歴史に1ページを加えたということは言語道断である」

カジノ経営は雇用を生み、金も稼げるが、地元の風紀は乱れ、部族の若者にもいい影響を与えていない。しかし、それでもインディアン部族のカジノ依存は減っていない。現在は247の部族が全米29の州で520カ所のカジノ経営に乗り出し、2018年は337億ドルの売り上げを誇っている（鎌田遵『癒されぬアメリカ』）。

観光客でにぎわうモニュメントバレーのビジターセンターに「ナバホ・コード・トーカー」の活躍を展示するナバホ族。残念ながら足を止める人はほとんどいない。

背の低い茂みがどこまでも続く、茫漠たるリトルビッグホーンを訪れる人々がレンジャーに発する質問の大半は、カスター將軍に関するものなのだそうだ。

ティグア族は「赤茶けた」という以外形容が見つからない地に極彩色で建つ賭博場に賭け、敗れた。

感染症からカジノまで。先住民の苦闘は続く。 🍷